

点訳グループ「もみじ」

清水ヶ丘通信「隣人」
第36号（平成18年
4月1日発行）より抜粋

南区で点訳のボランティアをされている「もみじ」の皆さんをお訪ねし代表の飯田さんにお話をうかがいました。

点訳グループ「もみじ」の発足は平成七年、もう十年以上活動しています。登録している会員は現在三十人ほどで、杉山光世先生のご指導のもと、大岡地域ケアプラザで月二回活動をしています。毎回「隣人」の点訳をお願いしていますが、ほかのケアプラザの広報紙や歌のサークルの歌詞カード、お手紙などを点訳しています。

また、小・中学校で点字学習の講師をしたり、福祉イベントで点字体験コーナーを設けるなど幅広く活躍されています。

点訳というと一般に墨字（普通の字）を点字にするというイメージが強いのですが、点字の文章を墨字に直す事が本来の仕事だそうです。

取材に伺った日は十五人ほどの方が集まっています。定例会では依頼された文章を読み合わせし、それぞれ自宅に持ち帰って打つ作業をします。広報紙は写真やイラストなど目で訴えている部分多いので本を訳すより難しいとお聞きしていたいへんお世話になっているということがわかりました。

杉山先生の「目の見える人は全体をばっと開いて興味のある所から読めますし、見出しや写真などで大まかな内容をつかむことができますが、視覚障害者は点の集まりだけで判断しなければなりません。一点一点に気持ちを含め、どうしたらうまく伝わるか常に読む人の立場にたって打つことが大切です。」というお話が心に残りました。



代表の飯田敏子さん



一字一句ていねいに読み合わせをする会員の皆さん。発足当時からずっと活動されている方もいらっしゃいました。「日本語は解釈が難しいので国語辞典は必需品」とのことです。

皆さんの優しさ、温かさが読む人の指先から心へと伝わっていくのでしょうか。



打ち合わせはかなり綿密です



笑顔のやさしい杉山光世先生。三十年以上も点訳に携わっていらっしゃいます。

視覚障害者の生活を豊かに。横浜市内の主婦らでつくる点字ボランティアグループ「もみじ」（飯田敏子代表）はこのほど、区内の緊急避難場所などを記した「南区防災計画」の点字版を作製した。区役所の窓口などでの閲覧や貸し出しも始まり、利用者からも好評を集めている。ボランティアのすそ野を広げようと活動しているグループを紹介する。（報道部・江連 能弘）

グループが活動を始めたのは一九九五年十月から。南区大岡の大岡地域ケアプラザが点字ボランティアを募ったことがきっかけでメンバーが集まり、翌九六年にグループ名を「もみじ」に決定した。

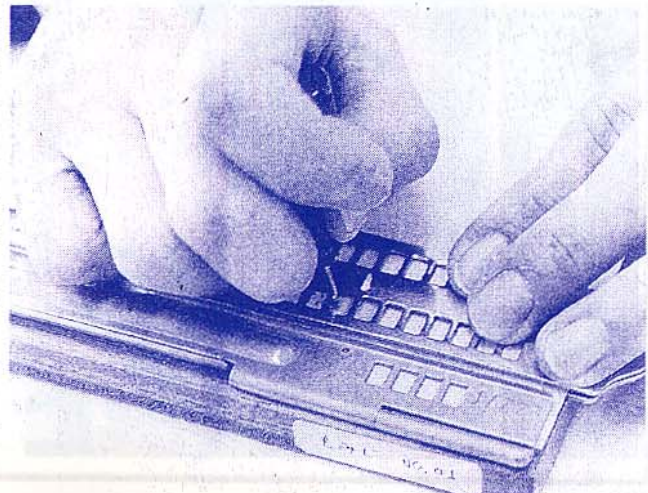
メンバーは、市内の主婦を中心に十八人。年齢層は三十代から六十代までと幅広く、男性も二人参加している。蔵書点訳や校正などの資格を持つ杉山光世さん（モミジ同区唐沢）が講師役

として作業を行う。言葉の区切り方で、読みやすさだけでなく意味までも通ってほしいとあり、一番慎重に行わなくてはならない作業だという。

「健常者は文を漢字で見ることができると、言葉の意味が把握しやすいが、視覚障害者は指を通して読み取った一文字一文字から意味を考えなくてはならない。単に作られたという感覚ではできない。」

「分ち書き」を終えると、点字器を使って、書く。作業に移る。点字は、縦三列の計六点を一マスと数え、一マスで一字分を表す。濁点などは二マス分を使う。慣れてくると、A4用紙一枚分ほどの情報は約三十分で書き上がるといふ。

昨年末には、百を超える点字版「南区防災計画」を三十部作製。区内の地域別の避難場所や、緊急時の水や食料対策などを盛り



6つの点で、マスに文字を手作業で「書き込む」。

神奈川新聞
（2001年（平成13年）
2月4日）より抜粋

南区の点字ボランティア

地道な活動 地域に光



点訳をするメンバー。和やかな雰囲気ながら、作業に入ると真剣な表情に変わる。

点字で防災計画や時刻表

り込んだ内容で、南区役所では五部を管轄し、閲覧や貸し出しもスタートした。

冊子を手にした視力に障害を持つ斉藤幹一さん（モミジ同区中里一丁目）は「さまざまな点訳冊子が増えることで情報も増えてありがたい。外出するだけでも冊子を読んでおけばあらかじめ頭の中に地図が描けます」と話している。

しかし、今後、視覚障害者が健常者と同様に活動できるためには課題も多い。

メンバーは、点字器を使って手作業で点訳しており、誤字が生じることがある。また、手作

◆点字 フランス・パリの盲院の元生徒で教官となったルイ・ブラユイ（Louis Braille、1809～59年）が1825年に考案。54年にフ

業であるため時間がかかり、大量生産とはいかない。現在では、点字タイプライターのほか、パソコンには点訳ソフトも存在するが、小所帯であるためハード面まで整備することは難しい。メンバーのほとんどは手作業で行う点字器を使っているのが実情だ。

同区内では、視覚障害者対象に、録音、誘導、そして点字のボランティアが活動しているが、その数はまだまだ少ない。中途失明者への対応も遅れている。だが、メンバーは少しずつボランティアのすそ野を広げようと地道に活動を続けていく。

小学四年生の教科書に「点字」が登場することから、昨年度区内の小学校五校を訪問し、児童を相手に点字体験教室を開いた。子供たちに点訳の作業をしてもらおうと、視覚障害者への関心を持ってもらうという試みだ。

飯田代表は「少しでも技術を磨き、これが必要とする人の役に立たい。小學生らにも体験してもらおうと、障害者と若い世代が触れ合う機会もつくっていきたい」と話している。フランス国内で採用され、日本では90年、東京盲聾学校の教員石川倉次（Ikawa Kuzō、1904年）によって普及された。